

新潟市民病院 消化器内科・光学医療室

【住所】新潟市中央区鐘木463番地7 【院長】小池 哲雄 先生 【病床数】660床(一般 505床、救命救急・循環器病・脳卒中センター50床、総合周産期母子医療センター57床、こども病棟40床、感染症8床) 【内視鏡検査・治療総数 7,800件(平成22年度)】上部内視鏡検査4,554件、下部内視鏡検査2,238件、ERCP288件、小腸内視鏡検査7件、ESD173件、EST54件、ERBD/ENBD151件、気管支鏡279件、PEG59件、食道拡張術38件、EVL39件 【スタッフ】医師11名(専門医4名、常勤6名、後期研修医1名)、看護師8名(うち内視鏡技師1名)、事務1名、洗浄員1名



人口80万の地域救急医療の砦として あらゆる内視鏡診療に対応する チーム医療を実践

三次救急医療を担う地域の基幹病院として 住民の命を守るあらゆる救急医療を提供

新潟市民病院は2007年11月に現在の中央区鐘木に新築移転し、第三次救急医療機能をもつ地域の基幹病院として、救命救急医療と一般臨床を集約した高度な医療サービスの提供を行っています。同院では救急医療に特に力を入れており、生命の危機に瀕した重症患者の急性期治療を行う救命救急・循環器病・脳卒中センターを併設しています。さらに、母子の命を守る救命救急センターである総合周産期母子医療センターを擁し、24時間体制で患者の搬送を受け入れています。ドクターカーやヘリポートも完備され、人口80万人の新潟市広域に対する「救急医療の砦」として、年間約15,000件もの救急外来を受け入れています。同院では電子媒体によるペーパーレス・フィルムレスのオペレーションも導入されており、院内のあらゆる場所に十分な台数の端末が設置され、どこにいても迅速に情報を共有することが可能になっているほか、電子カルテ上に検査や治療の説明のための文書テンプレートが掲載されているなど、電子システム化が進んでいます。

近代内視鏡診療に対応した高機能設備と 良好なコミュニケーションによるチーム医療で 広範かつ多数の内視鏡診療に対応

同院の光学医療室は、消化器内科、消化器外科、呼吸器内科を主体に専門性の高い内視鏡診療を行っています。最近ではインターベンション手技が多用されているため、光学診療や救急に関する専門知識を幅広く習熟したコメディカルスタッフが、救急と放射線科も兼務する形でローテーション化されているのが大きな特長です。限られたスタッフで同時にいくつもの検査を並行して行えるよう、6つの検査室のレイアウトは看護師の導線を重視した作りになっています。また、救急からの搬送にもスムーズに対応するため、ベッドごと搬入してそのまま処置が行える広いゲートや設備を

整えています。ベッド移動での患者搬送を基本とする電動ベッドも進んでおり、患者様はセデーションからリカバリーまで自分のベッドに寝たまま処置を行えるようになってきているそうです。消化器科副部長で光学医療室長と救命副センター長も兼務されている古川浩一先生は、「消化管出血や閉塞性黄疸などの緊急内視鏡処置を要する症例は年々増加傾向にあり、夜間休日時間外に行っている緊急内視鏡止血症例は年間で約190件に上ります。また、救急で搬送された患者さんの半数近くが消化器科に入院されており、その点でもスタッフの万全な体制と救急との連携は重要です」と指摘されました。そのため同部門では毎週水曜日に医師とコメディカルの合同カンファレンスを行い、常に最新の情報を全員で共有するようにしているそうです。また、誰がどの手技を行っても均一の介助が行えるよう、物品管理についても汎用性の高いものを選択して標準化を進めているそうです。



光学医療室の先生方
(写真前列右：消化器科副部長・光学医療室長・救命副センター長 古川浩一先生)



馴れ合いを排した厳しいチェック体制と ディスポーザブル製品の導入が 隙の無い万全の感染管理を実現する

同院では感染管理に対する意識も高く、院内のICT委員会が年に2回ほどスコープ洗滌の抜き打ちチェックを行っています。このチェック機能により適切なスコープ消毒を行っても特定される菌が指摘されるなど、かなり厳しい安全管理体制がとられています。古川先生は、「感染管理については、部門内で行っていると馴れ合いが生じ、手順さえきちんとしていれば問題ないとされることもあると思います。当院の場合はスコープ洗滌の検証まで行っているのので、患者様にも安心して受診いただけると思います」とコメントされました。また、新型ヤコブ病などの未知の感染症のリスクや、常に安定したパフォーマンスの提供を考慮し、内視鏡処置具に関しては出来る限りディスポーザブル製品を導入しているそうです。

豊富な症例数と手厚い教育体制で 短期間で内視鏡のスペシャリストを育成する

同院は昭和54年度より厚生省指定臨床研修病院として卒後臨床研修を行い、平成16年度の卒後臨床研修必修化に際しては単独型臨床研修病院として臨床研修プログラムを全面改訂しています。「人間性豊かな医療人の育成をめざす」という病院理念のもと、光学医療室でも4名の内視鏡指導医によるきめ細かい指導が行われています。研修内容については研修医個人の興味や希望を優先し、後期研修医は1回以上の全国学会におけるテーマ演題の発表やワークショップのプレゼンターを務めることを必須としているそうです。光学医療室はNBIやコンベックスタイプの超音波内視

鏡などの最新設備が整い、またHybrid NOTESを代表するような最先端手技のほか、救急や小児ERCPなどを含めた幅広い分野の内視鏡治療など、研修医にとっては広範かつ最先端の内視鏡技術を学べる環境となっています。古川先生は、「当院のような施設は、最新手技を行うパイオニアというより、むしろある程度確立された新しい手技を、タイムラグを少なくして患者様に還元することが役割だと考えています。つまり、確立された先進医療を数多く行い、その中で完全管理上のピットホールを探し出して是正していくようなことが求められるのではないかと考えています。そう考えて、合併症の低減や早期診断、リスクマネジメント上の盲点など、主に安全管理に繋がる研究を中心に行い、学会などの場で発表してもらおうとしています」とご説明いただきました。限られた陣容で広範かつ多数の内視鏡診療を行っている光学医療室は、意欲の高い若手医師にとって、短期間で様々な技術や知識が効率よく習得できる、学びの場として最適の環境のようです。

同院は病院全体で各人の自発性が尊重され、小さな気付きや改善を日常的に行う文化が定着しています。効率化や標準化を進める一方で、患者様のそばに寄り添う看護部門では、検査や治療において一連のプロセスを同一のスタッフが看護する担当制を採用するなど、心の通った医療の提供をスタッフ一人ひとりが高い意識で実践しています。このように、スタッフ個人の日常的な小さな改善が奨励される風通しの良い環境の成果の一つとして、病院で実施している患者アンケートにおいて、特に接遇などのソフト面で高い評価を得ているそうです。



光学医療室のみなさん